

美的感性の遺伝的獲得と文化的発達

Genetic Origin and Cultural Evolution of Aesthetic Sensibility

村松 慶一 (Keiichi Muramatsu) 指導：松居 辰則

1. 背景と目的

美しいものに対して心を動かすことは、すべての人間において共通の性質であると考えられる。このような美的感性の性質について自然科学的な理解はほとんどなく、現状では感性という用語の定義さえ研究者の間で定まっていない。そこで本研究は美的感性を捉える枠組みを提案するとともに、進化的な視点から美的感性の役割を考察する。これは美的感性をモデル化するための指針となり、「人工感性」を実現するための基盤を提供し、ひいては感性一般や心の理解への貢献が期待される。

2. 美的感性を捉える枠組みの提案

美学における美的体験は、意識において美的な感情を体験する直接的な過程を総括した概念である。この美的体験は表象性の原理によって成立するという見解がある。表象性とは人間と対象の相互媒介的な関係であり、この関係を場として人間は本来的なる自由な生を自覚し、その方式によって美的範疇が区別されるのである。

神経心理学では感情を「経験される全心理過程から、有形性表象を引いたもの」と捉えており、感情の体験には身体的なフィードバックが必要である。こうした心の内容を表すために、バイオサイバネティクスの分野では、意識内容の張る空間という概念空間（本研究では、コンテンツスペースと呼称する）が提案されている。意識内容で構成されるこの概念空間をもって心と定義される。この精神的側面では精神活動が言語によって表現され、神経的側面では神経活動が神経回路網モデルなどにより表現されることから、精神活動と神経活動を橋渡しする概念といえる。

この枠組みに基づいて美的感性を捉えることで、美的感性の内容を言語によって記述することが可能であり、感情を中心とした心のダイナミクスであると理解される。

3. 美的感性の獲得と発達に関する仮説の提案

人類進化の過程を考えれば、美的感性も他の形質と同様に進化の産物であると解される。したがって、その適応的な価値を明らかにすることによって、美的感性の本来的な役割が理解されよう。

美的体験は本来的なる自由な生の自覚であるため、内的

な視点を持つことが美的感性の成立にとって必要な条件である。感情を体験するために身体的なフィードバックが必要である点で、体性感覚に意識を向けることは、感情に意識を向けることと原理的に同じであるといえる。したがって、適応的な理由によって、積極的に体性感覚および感情に意識を向けるようになったことが美的感性の獲得であると考えられる。本研究では「ホモ・ハイデルベルゲンシスにおいて製作した道具を用いて狩猟を行うなかで、意識と感情の間に結びつきが生じたことが美的感性の遺伝的な獲得として位置づけられ、ホモ・サピエンス出現の後に感情体験を促す補助装置として文化的産物すなわち芸術が発達した」という仮説を提案した。

4. 考察

現代の彫刻や絵画までには文字の発明による意識構造の変容や表現技術の発達など歴史を経ており、感情体験の場が道具の製作と使用から洞窟壁画のような原始美術へ移ったことが始原と考えられる。ホモ・サピエンスの出現に際して獲得されていた、抽象的思考を行う能力、行動上・経済活動上・技術上の発明能力、シンボル操作の能力などが現代人において芸術が発達する助けになったと考えられる。美的感性は狩猟の成果に対して行動を動機づける。これは記憶に対して快感情や不快感情を関連付けることであり、結果的に良いものと悪いものを見分けられるようになることが美的感性の役割として考えられる。その意味では美的感性をひとつの問題解決として考えることが可能である。

5. 結論

本研究では意識内容の張る空間による心の定義に立脚し、感情を中心とした心のダイナミクスとして美的感性を捉えることを提案した。また、意識の内容としての感情に着目し、美的感性の遺伝的な獲得と文化的な発達についての仮説を提案するとともに妥当性を検討した。それによると、美的感性の遺伝的な獲得はホモ・ハイデルベルゲンシスにおける意識と感情の結びつきであると考えられ、ホモ・サピエンスにおいて抽象的思考やシンボル操作などの能力を獲得したことによる技術の向上が美的感性の文化的な発達であるといえる。